

幸いなるかな、目を覚ましている者

―イエスの幸福論―

ルカによる福音書十二章 35節〜48節

(名古屋市) 堀澤 六郎

「一」はじめに

内村鑑三のキリスト教信仰の中心は十字架による贖罪、復活、そして再臨の三つといわれています。正直なところ、私にとってこの三つの中で再臨信仰はまだ十分に受けとめられていません。内村鑑三が再臨運動に深く関わった時代的背景は第一次世界大戦、そしてアメリカ合衆国の参戦などがあったといわれています。現在、日本においても世界においても暗雲が立ち込めて終末的な希望のない時代です。再臨は終りの事柄に関する「終末論」と関わっています。私の仕事の一つに特別養護老人ホームでの診療があります。認知症や様々な障がいを持って介護を受けながら人生の終りに臨んでおられます。それらの方々にとのようにより添っていったらよいのか常に問われています。私自身も人生の後半に至り、終わりを見つけて生きることが求められています。

内村鑑三の真理を継承した一人に三谷隆正がおりま

す。主著『幸福論』は私の学生時代からの愛読書で、繰り返し読んできました。太平洋戦争の敗戦が迫っている終りの状況の中で、「幸福」について思索と祈りを重ね、遺著として遺されたものです。一九六八年七月に新教新書の一冊として、高橋三郎先生の解説のもとに新たな装いで出版されました。私はこの『幸福論』に出会ってから、何回読み返したでしょうか。特に、青年時代、様々な迷いの中にいた頃、繰り返し読み返しました。あれから数十年が過ぎ去りました。解説を書かれた恩師の高橋先生も今は天におられます。今回改めて読み返し、新たな感銘を受けました。終わりに向けてさらなる一步を踏み出すように促されました。

内村鑑三の晩年の有名な言葉に真理は二つの焦点を持つ楕円であるという譬えがあります。本日のテキストを「再臨」と「幸福」の二つの焦点を見据えて、一緒に学んでまいりたいと思います。

「二」テキストの読解『目を覚ましていなさい』

ルカ十二章 35〜48節

ルカは本日のテキストの「再臨とその遅延」に関する

譬えを三つ並べて編集してありますが、マルコ、マタイと比較しながら、読み解いてゆきたいと思えます。

① 「婚宴から帰る主人を待つ僕」の譬え

(ルカ十二章 35 ～ 38 節)

この譬えはルカのみで、ルカの特長資料あるいはQ資料によるのでしょうか。当時の「婚宴」は盛大に行われ、数日続いたということです。ですから「主人」が、婚礼からいつ帰るか分かりませんでした。「真夜中」「夜明け」になることもありました。

「目を覚ましているのを見られる僕は幸いだ。」直訳では、「幸いなるかな、僕たち」はどんな僕かというところ、関係代名詞で受けて、「主人が帰ってきて、目を覚ましているところを見つけ出す僕たち」となりますから主人が主語です。「幸いなるかな」は原語でマカリオスです。本日のキーワードの一つで、山上の垂訓の冒頭の「幸いなるかな、心の貧しき者(マタイ五章 3 節)」と同じ言葉です。どうして「幸い」なのでしょう。「はつきり(原語は「アーメン、」)言うておく」とイエスは大切なことを語られます。「主人が腰に帯を締めて、僕たちに食事の席で給仕をしてくれる」ということです。主の再臨の三つの譬

えの最初にルカは、マルコ、マタイにはない特殊資料を編集して、再臨は祝福された喜ばしい出来事であることを示しています。マルコ、マタイでは再臨は「いつ来るか分からない」ことに重点があり、そのために「目を覚ましていなさい」という命令になっています。

② 「夜にやって来る泥棒」の譬え

(ルカ十二章 39 ～ 40 節、マタイ二十四章

43 ～ 44 節)

この譬えはマルコにはなく、マタイとルカに共通で、文言もほぼ同じですので、Q資料によるものとされています。主の日、主の再臨を「泥棒」に譬える記事は新約聖書の他にも見られます。(第一テサロニケ五章 2 節、第二ペトロ十三章 10 節など)「泥棒」は当時、よくあったことで、分かりやすい譬えだったと思われます。「泥棒」は良くないことと、いつ来るか分からないという二つの面があります。元来はいつ来るか分からないように重点があつたと思われれます。「人の子は思いがけない時に来る」、主の再臨はいつ来るか分からないので、「用意しておく」ようにという教えです。しかし一方で、泥棒の良くないことのイメージも広がり、再臨が否定的に捉えら

れる可能性もあります。ルカはそのことも考慮して、マタイにはない「婚宴から帰る主人を待つ僕」の譬えを最初に編集したのでしょうか。ルカは再臨が祝宴であること、泥棒のようなものであること、いつ来るか分からないから用意するようにと語り、再臨をどのように受けとめるかを次の「忠実で賢い管理人」の譬えで展開しま

③「忠実で賢い管理人」の譬え

ルカ十二章 41～48節、マタイ二十四章

45～51節)

この譬えはマタイとルカに共通でQ資料によるものと思われます。ルカは、ペテロが再臨に関する泥棒の譬えは「わたしたちのためか、みんなのためか？」と尋ねたのに対して、イエスが、この「忠実で賢い管理人」の譬えを語られたと編集しています。そのことからこの譬えを、元来のQ資料の視点から読み解く方法と、とルカの視点から読み解く方法の二つが考えられます。「忠実で賢い管理人」は誰か、イエスは譬えで語られます。

「主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。」

ここも、直訳しますと、「幸いなるかな、その僕」、その

僕を関係代名詞で説明して、「そのように行っている（時間どおりに食べ物を分配している）僕を、主人が帰ってきて、見つけ出す。」となります。主人が命じた、「時間通りに食べ物を分配すること」を忠実に行っていることが、「忠実で賢い」と言われています。イエスは重要なことを言う時、冒頭に「アーメン」と言われます。ルカはギリシア語に訳して「確かに」となっていますが、平行情事のマタイでは「アーメン」になっています。「忠実で賢い管理人に全財産を管理させる」のだと大切なことが指摘されています。その一方、「主人の帰りは遅れる」と思い、僕が言われたことを忠実にしないで愚かに振る舞っている、思いがけない時に主人が帰って来て、「厳しく罰します」。「厳しく罰する」のギリシア語は「真つ二つに切断する（デクソトメオー）」という激しい言葉が使われています。原始キリスト教の共同体はイエスがすぐに来るといわれた「再臨」を文字通り受けとめていましたが、その再臨が遅延していることに対して、それどのように受け止めるかが、大きな課題でした。終末論としての再臨は最後の審判です。47～48節はルカが編集した記事と思われます。「主人の思いを知っていてし

なかった」のか、「知らずにしなかった」のかで、裁きが変わってくると指摘しています。「多く与えられ、多く任せられた者ほど多く求められ、多く要求される」と裁きが量的に考えられていると思われれます。

この再臨の譬えをルカと元のQ資料の二つの視点から考えてみます。まず、ルカ的な視点からでは、ペトロの問いに対してイエスが答えられたと設定されています。その場合、再臨（最後の審判）は量的に受けとめられているのではないかと思われれます。「知っている者」、「知らなかった者」と譬えるのは寓愈的（アレゴリー）です。再臨の遅延に対して、ルカの共同体はエクレーシア（教会）が組織化、制度化されていたと思われれます。その中で、「多く任せられた」指導者たちと一般信徒の差が生じてきたのではないのでしょうか。多く任された者ほど、その責任は大きいのも大切な真理です。その後、教会はさらに制度化してゆき、修道士、聖職者と一般信徒の役割が分離されてゆきますが、宗教改革者ルターによって、「万人祭司説」が示され、無教会もその精神を継承して、すべての信徒がそれぞれに大きな責任を任されていると受け止めてきたのではないかと思われれます。

それに対して、イエス（Q資料による）の視点で考えてみますと、再臨（最後の審判）のできごとが鮮明なイメージで語られていると思われれます。「全財産を管理させる」¹「厳しく罰する（直訳では真つ二つに切断する）」²と裁きが鮮やかに示され、聞く者に衝撃的な問いを投げかけます。イエスの譬えは元来、隠喩的（メタファー）であつたと考えられています。メタファーでは譬えに固定化された一つの答えがあるのではなく、譬えでしか伝えられないこと、そして聞く者への問いかけです。

「三」 示されたこと

（1）「幸いなるかな（マカリオス）」という言葉は、一般的に「幸福な」、「よい」という意味で用いられていました。古代・ヘレニズムのギリシャの世界では、神々や人間が非常に大きな幸福を受けていることを表したり、日常語として、とりわけ身分が恵まれていることや、金持ちの状態を表していました。旧約聖書のギリシャ語訳（七十人訳）では「アシユレー（幸いな）」の訳語として用いられました。「いかに幸いなことか（アシユレー）」、神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道に

とどまらず、傲慢な者と共に座らず」（詩篇一篇1節）
 新約聖書ではマカリオスという言葉は50回用いられて
 いますが、福音書が多く30回です。このうち、イエス
 の言葉は25回です。（マタイ13回、ルカ11回、ヨハ
 ネ2回）新約聖書の「幸い」という言葉のうち、特に「幸
 い」章句と呼ばれる例がイエスの言葉にあります。マカ
 リオス＋主語、（＋理由・条件）という文型です。山上の
 垂訓のイエスの言葉の「幸いなるかな、貧しき者、天の
 国はその人たちのものだから。」などです。この場合、主
 語は①状態を示す場合（例、飢えている者）②振る舞い
 を示す場合（例、平和を作り出す者）の二つの場合が考
 えられます。新約聖書の「幸いなるかな」は、旧約聖書
 の知恵文学（箴言、詩篇など）の「幸いなるかな」の伝
 統を継承しているといわれています。知恵文学では教え
 や戒めの言葉でしたが、イエスの「幸いなるかな」は旧
 約の伝統を継承しつつ、それを乗り越えて、他に例のな
 い全く新しい表現と言われます。イエスの「幸いなるか
 な」の特徴には、①イエスご自身が語られる終末論的発
 言で「おめでとう！」という言葉です。抽象的、一般的
 な思弁的な言葉でなく、具体的に目の前にいる人々に語

られた言葉です。「貧しい、飢えている、悲しんでいる」
 そのような状態の人々に祝福を宣言されます。②振る舞
 いを示す知恵文学的な発言においても、旧約の「幸い」
 に到る条件や理由としての教えや戒めではなく、イエス
 ご自身によって祝福の宣言をされた者が、喜びと感謝の
 応答として行動に踏み出す招きの言葉として語られてい
 ると思われます。

イエスの幸福論とは何でしょうか。イエスの幸福論と
 は、イエスご自身に「幸いなるかな、おめでとう！」と
 呼びかけられ、イエスと真に出会うことにより、イエス
 の来臨を終末の出来事として、イエスご自身から祝福を
 受けることです。そのことをもとに、イエスの祝福に包
 まれることによって、感謝の応答として、一步踏み出す
 招きの言葉として、振る舞いへの勧めがあることを示さ
 れました。元来、ルカの福音書にあるように、絶対的に
 貧しい者に語られたイエスの祝福の言葉ですが、マタイ
 の福音書では精神化されています。それは旧約の知恵文
 学のように条件として、心が貧しくなった者だけが幸い
 なのではなく、幸いなものと祝福されたことにより、そ
 の感謝の応答として、心が貧しくなるように振る舞うこ

とへの勧めの言葉です。「心が貧しく」なるとはどんな振る舞いかは、それぞれの一人ひとりに問われています。ルカ十九章のザアカイの例などがあります。このイエスの祝福において、神の国（天の国）は到来するということがイエスの幸福論です。

（2）「目を覚ましていて」ことについて

イエスが共にいて、「幸いなるかな」と祝福の言葉を語りかけてくださり、その応答としての振る舞いが「目を覚ましていてのこと」です。目を覚ましていてことは具体的にどのようなことかと問いかけられましたが、次の三つのことが示されました。

① 祈ること

イエスはゲッセマネ（ルカではオリーブ山）で祈られました。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」（マタイ二十六章38節）しかし弟子たちは眠ってしまいました。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていない。」（ルカ二十二章46節）祈りは二つの面があります。端的に祈り求めることです。祈り求めることは、神の国（支配）、

私たちの命を支える糧、罪の赦し、悪からの救いです。（ルカ十一章2、4節）それとともに、祈りは聴くことです。神の前に沈黙し、自分の思い、願いでなく御心を聴くことです。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」（ルカ二十二章42節）

② 待ち望むこと

キリストの再臨は泥棒のように、良くないこと（裁き）が突然にやって来るという面もありますが、他方、ルカが最初の譬えで示した様に、主人が帰ってきて、祝宴を催し、給仕してくれるという面もあります。五千人に食べ物を与えた記事（ルカ九章10、17節）、放蕩息子が帰ってきたときに盛大な宴会を催す（ルカ一五章22、24節）など、祝宴のイメージで良いことを待ち望むことも示されました。再臨を最後の審判と考えると、自身の罪の現実を知らされ、恐ろしく不安になります。しかし、主が給仕してくれること、ヨハネ伝の最後の晩餐では、イエスご自身が、弟子たちの足を洗ってくれたことなどを思い出しますと、主の再臨は、罪が赦され神の国の祝宴への招きだと示され、再臨を強く待ち望むよ

うにと示されました。

③ 賢く、忠実であること

賢い（フロニモス）という言葉は新約で14回用いられています（ルカ2回、マタイ7回、パウロ5回）。ルカではもう一箇所、最も難解な譬えの一つ『不正な管理人の』譬えに出てきます。「主人は、この不正な管理人の抜け目のない（副詞・賢く）やり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。」（ルカ十六章18節）マタイでは、「岩の上に自分の家を建てた賢い人」（マタイ七章24節）「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」（マタイ十章16節）「そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。」（マタイ二五章2節、十人のおとめの譬え）パウロはこの世の賢さには批判的です。「兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように」（ローマ十一章25節）しかし、パウロは「わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実

をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」と祈ります（フィリピ一章9、11節）。高橋三郎先生は「重さの量り方」をよく指摘されました。ものごとを判断する時の視点、大切なこととそうでないことを見分けることの重要性です。

ピストス（忠実な、真実な）という言葉は、新約で67回用いられています。ピステイス（信仰）の形容詞形です。神、主人に対しては「忠実な」、神が人に対しては「真実な」などとなります。藤井武が「信仰よりも真実を選ぶ」といった話は有名です。矢内原忠雄は次のように説明しています。「もし信仰と真実といずれかを選ばねばならないとするなら、自分は真実を選ぶ、なぜなら真実なる心は神を知ることができ、真実のない信仰はパリサイ主義に陥るから」（『全集24』p779）

ところで、「不正な管理人の譬え」のイエスの言葉「だから、不正にまみれた富について忠実（ピストス＝真実な）でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるもの（アレテーノス＝真の）を任せるだろうか（ピステウオ）、ピストスの動詞形。」をどのように受けとめるかが問われました。（ルカ十六章11節）真実をこよなく愛し

た、藤井武と三谷隆正はこの譬えをどう読んだのでしようか。それよりも私自身がこの譬えのメタファーをどのように受けとめるか、大きな問いかけでした。

(3) 終末論と再臨

終末論とは終りのことがらで、個人の終り、世界の終り、再臨、最後の審判などに関する難しい課題です。イエスご自身が「人の子が来臨する」ことを重ねて語られました。再臨を表すギリシア語はパルーシアで、来臨という意味で、新約聖書では24回用いられています。動詞「傍らに存在する、来ている」から作られた名詞で、時に国王や皇帝の来訪などを表す術語としても用いられ、そのためカルカはこの言葉を用いていません。「再び」という意味は含まれていないのですが、新約聖書ではイエスが再び来られるという意味で、「再臨」と訳されています。新約聖書では24回のうち、キリストの再臨の意味で17回用いられています。イエスが再臨されるという記事は新約聖書全体に認められます。

内村鑑三は一九一八年〜一九一九年に、第一次大戦、アメリカ合衆国の参戦の背景の中で、再臨運動に関わり

活動し全国に58回の講演旅行をしました。それらの講演がまとめられて『基督再臨問題講演集』として出版され、「聖書研究者の立場より見たる基督の再臨」、「世界の平和は如何にして来るか」など17の講演が納められています。付録として編集されている、『聖書の証明―基督再臨に関する主な聖語』の中で「基督の再臨は余輩の信仰でない、聖書の信仰である・・・新約聖書だけでも直接間接に再臨について記述するところは実に418箇所・・・」と記しています。(『全集24』)

イエスが来られるということ「再臨パルーシア」を最初の弟子たち、そしてパウロを始め初期のキリスト教会(エクレシア)は真剣に受けとめました。新約聖書は一世紀半ばから二世紀前半に書かれた諸文書集ですが、最も古い第一テサロニケの信徒への手紙から、もつとも新しいとされる第二ペトロの手紙までキリストの来臨について語られています。パウロの最初の書簡の第一テサロニケへの信徒への手紙の四章15節では、パウロは「主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日(パルーシア)まで生き残るわたしたちが、眠りについてた人たちより先になることは、決してありません。」とい

うように、主キリストの再臨を身近に迫っていると受けとめています。しかし、新約聖書の中で最も新しいといわれる第二ペトロの手紙には、二世紀前半の頃の当時の信徒たちの間に「主が来る（パルーシア）という約束は、いったいどうなったのだ。」（三章4節）という疑問が出されており、それに対して「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」（三章8節）というように、再臨が遅れていることが受けとめられ、どのように対応してゆくか論じられています。ルカにとつて、主の来臨の遅延をどのように受けとめるかということが課題の一つでした。ルカの歴史観は、イエスが地上で生きられた時代を「時の中心」、それ以前を「イスラエルの時」、そして来臨までの時を「エクレーシア（教会）の時」であったとされています（コンツエルマン）。

終末論には世界の終り、最後の審判という世界規模、宇宙規模の大きな課題と共に、個人の終り、死の問題もあります。今年には宗教改革五〇〇年の記念の年ですが、ルターの時代も同じ課題がありました。ルターの『死への準備についての説教』（一五一九年）があります。その冒頭で、この世との別れにあたって、自分の財産を適切

に整理し、死後に問題を残さないようにと勧めます。ついで別れに当たり自分に害を加えた全ての人を赦さなければならぬ、それと共に自分が人々を傷つけたことの赦しを請い願わなければならないと奨めています。「たとい明日が世界の終りの日であっても、私は今日りんごの木を植える」という言葉があります。ルターの言葉とされていますが、明らかな根拠は無いそうです。ただ、ルターの生涯とその信仰から、ルターの言葉らしいといわれています。「徳善義和『マルチン・ルター』（教文館）」フランスのプロテスタントの哲学者のポール・リクール（一九一三、二〇〇五）は高齢にいたっても思索を続けました。87歳で完成させた最後の大著である『記憶・歴史・忘却』の最後に、「歴史の底には、記憶と忘却がある。記憶と忘却の底には、生がある。だが、生を書き記すことはまた別の話である。未完。」と記したそうです。リクールはその後も思索を続けましたが、この言葉は墓碑銘のようなものといわれています。（文庫クセジュ『ポール・リクール』）「未完」という言葉が印象的です。夏目漱石の『明暗』、モーツァルトの『レクイエム』、バルトの『教会教義学』など、未完に終わったものが多くあ

ります。しかし、よく考えてみれば、わたしたちの一人ひとりの人生そのものも、未完ではないかと思えます。しかし、それを完成させてくださる方がおられます。キリストの再臨です。その希望に支えられて今日の一步を歩みだそうと示されました。

「四」 結び

現在、日本そしてグローバル化した世界において、諸問題が山積し混迷の中で終末的な状況の中にあります。本日はその中でイエスが、「幸いなるかな、目を覚ましている者、私が見つけ出すから。」と語ってくださいていることを学びました。

本日の午後には、平和行進600回の記念の行進が行われます。並大抵のことではありません。遠州教会牧師の松本先生によって一九六四年に始められ、溝口先生が志を合わせ、その真実が継承されてゆかれました。本当に尊敬すべきことです。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」（マタイ五章9節）平和を目差す600回の行進、振る舞いは、今日学びましたように、「幸い」に至る条件ではありません。5

99回の中には、雨の日、風の日、炎天下、雪の日もあり、大変な苦勞をされたことと思えますが、恐れながらも、人間の側からの努力からだけでは、続かなかつたでしょう。それが奇跡的に実現できたのは、「幸いなるかな」と呼びかけ祝福してくださる主イエスが共におられたからだと思います。主イエスの祝福への感謝の応答として、浜松聖書集会の皆様のお一人おひとりが、しっかりと受けとめられて600回に到ったのだと思います。本当に「おめでとう」ございます。この「おめでとう！」は私の言葉ではなく、主イエスからの祝福の言葉として受けとめていただきたいと思います。

三谷隆正の『幸福論』の最後の「結語」の一部を紹介して終りにしたいと思います。

「良い健康と清純な家庭と一生を投じて悔いのない職業と、この三つをあわせ持つことは大きな幸福である。しかし、それにもまして大いなる幸福は新しいのちの源に出会って、新しく造り変えられることである。．．．それにはどうしたらよいか。真実一途の生活をするのだ。ほかに道はない。．．．しかる時、たとえもし一生を苦しみ通し、悩み通すことがあっても、それは深く祝福され

た、充ちたりた一生であろう。なぜならば真実な一生にも増して神の祝福に値するものは他にないからである。」

真実で忠実な僕たることを目差して、何が大切であるか祈りつつ目を覚まして、「幸いなるかな」と呼びかけ祝福してくださる主イエスの来臨を待ち望んで一歩ずつ歩んで参りたいと思います。

≪付記≫二〇一七年二月十二日に浜松聖書集会で語らせて頂いた聖書講話をまとめたものです。当日の午後は、浜松市憲法を守る会の平和行進600回の記念すべき日でした。その行進に参加を許され、忘れ得ない一日となりました。